

子どもが生まれてよくわかったのは、子育ての大変さだ。
大変なんてもんじゃない。戦いだ。修羅場だ。
赤ちゃんは、良妻賢母的なママが抱っこすれば泣きやみ、
あとはパパがお風呂に入れればいい、などというきれい事ではない。

核家族が標準になってしまったこの社会では、
社会全体が地縁血縁となって子育てを見守ってあげなければならない。
赤ちゃんがいたらみんなでこぞって祝福する気持ちでもって笑いかけるのだ。

『赤ちゃんにきびしい国で、赤ちゃんが増えるはずがない』／境 治・著／三輪舎・刊より

プログラム

主催者よりご挨拶〔13:00～13:10〕

1 ゲストトーク〔13:10～14:00〕 「赤ちゃんにきびしい国は変えられる」

ハフントンポストで「17万いいね!」を記録し書籍化されたブログ「赤ちゃんにきびしい国で、赤ちゃんが増えるはずがない。」著者 境治氏によるゲストトーク!

2 パネルディスカッション〔14:15～15:15〕 「子育てを取り巻くそれぞれのリアル」

パネラー陣それぞれの育児体験や家族経営の実態、子育て世帯を取り巻く環境への課題意識を話題にしたパネルディスカッション。

- パネラー: 境 治氏、中岡 祐介氏、中 陽子氏
- コーディネーター: 主催者 長廣 百合子氏、長廣 遥

3 ワークショップ〔15:30～16:30〕 「みんなで考える 子育て期の働き方と暮らし方」

地域、職場、家庭はどう変われば良いのか? 参加者全員で「子育て期の働き方と暮らし方」における課題と解決方法を探るワークショップ。



境 治氏
さかい おさむ

1962年福岡市生まれ。東京大学卒業後、広告会社I&Sに入社しコピーライターに。その後、フリーランスとして活動したあとロボット、ビデオプロモーションに勤務。2013年から再びフリーランス。ブログ「クリエイティブビジネス論」はハフントンポストにも転載されている。著書『テレビは生き残れるのか?』(ディスカバリー・パブリッシング)『赤ちゃんにきびしい国で、赤ちゃんが増えるはずがない。』(三輪舎)



中岡 祐介氏
なか おか ゆうすけ

株式会社三輪舎 代表取締役・編集者・Commons.jp 発行人。1982年茨城県ひたちなか市生まれ。東京学芸大学修士課程修了後、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社入社。8年の会社勤めを経て、2014年、「暮らしのオルタナティブを提案する出版社」をポリシーに株式会社三輪舎を設立。
<http://3rinsha.co.jp>



中 陽子氏
なか ようこ

コミュニケーションプランニング Bringo代表。大分県出身。地場企業の広報課で7年間勤務後結婚。その後は夫の転勤にあわせて転職やテレワークで正社員として仕事を続け、市のNPO・ボランティア支援施設の広報担当兼事務局長、人材育成会社の営業企画・広報業務など様々な業務に従事。2013年に出産を機に退職後、育児中にPRプランナーの資格を取得。2014年12月に開業し、広報業務をメインとしたフリーランスに。夫と娘(1歳11か月)と暮らす。

【会場】電気ビル 共創館 3階 (福岡市中央区渡辺通2-1-82)



Logista株式会社 共同代表(妻)長廣 百合子
共同代表(夫)長廣 遥

【主催者挨拶】

チラシを手にとりいただきありがとうございます。長廣百合子です。私がゲストでお越しいただく境さんのブログを読んだのは出産2日前。はじめて前駆陣痛を感じた夜のことでした。その頃の私は日中ワイドショーを眺めていることが多く、虐待のニュースやベビーカーを電車に乗せることは是非、女性の社会進出・活躍推進ネタが取り上げられる度に「社会が期待する母親像、女性像」に辟易していました。この国はまだまだ子育てをする女性(母親)に優しくない。そう感じていたからです。しかしそれは、女性だけでなく、「父親になった男性」にも当てはまることでした。「子どもが生まれたことで仕事への熱意が失われたわけではない。ただ、家庭も仕事も両方大事にしたい」そのような思いを実現することが容易ではない職場環境、本音を語り合えない夫婦関係、そこに大きな壁があることを、私たち夫婦は親になってはじめて理解したのです。

「赤ちゃんにきびしい国で、赤ちゃんが増えるはずがない。」は「子育て期の夫婦にきびしい国で、赤ちゃんが増えるはずがない。」とも読むことができます。そしてそんな環境を当事者として変えていかなくてはならない。私たち夫婦は、未来を担う子どもたちのためにも真剣にこの課題と向き合いたいという思いで、今回のイベントを企画しました。ご参加いただく皆様の状況は100人100色だと思いますが、それぞれに何を課題に感じているのか教えていただければ幸いです。一人で挑むには険しい壁ですが、一人でも二人でも流れを変えようとする当事者が生まれることで、この国はきっと「赤ちゃんに(子育て期の夫婦に)やさしい国」へ生まれ変わっていく。そう信じています。

